

箱根集会報告（第2回） 実践報告は、まず「私」から

この投稿は昨年、箱根で行われた研究所主宰の集会の報告の第2回目である。前投稿の末尾で述べたようにネクサスについて考えたことを書くつもりであるが、その前に前投稿について修正すべき箇所があることに気づいたので以下に記す。

ひとつめは、「病気の「水源地」が宿便である」と述べた行である。間違いではないが正確ではない。というのは、寺島先生のレジュメでは病気の水源地を「心と体の歪み」と定義し、体の歪みとして「宿便」を位置づけているからである。心の歪みの方は「心の便秘」と表現され、具体的症状としては不眠症・躁鬱病という病名が挙げられている。

私が「宿便」という言葉をはじめて知ったのは甲田光雄『奇跡が起こる半日断食』という本だった。三年前に始まった寺島健康講座の一番最初に紹介された、船瀬俊介『三日食べなきゃ七割治る』とともに私が朝食抜きを始めるきっかけとなった本である。この本も久しぶりに開いて拾い読みしていたら「出る／入る」についておもしろい比喩が見つかった。曰く「エレベータでも電車でも、出てから入ります。まだ降りる人がいるのに乗ったら、混乱が起きます」。(同書 p.75)

この「心の宿便」は「心理的ストレス」と言い換えてもいいだろう。健康を保つにはこのストレスをどう排泄するかが問題になってくる。ところがこれを完全に排出することはできない。なぜなら、仕事や生活におけるストレスを完全になくすことは不可能だからだ。例えば、私の勤務先は次年度、統一テキスト・シラバス・テストを実施することになった。専門学校が各種検定試験で実績を上げているシステムを大学の英語教育にも適用すれば英語力がつくと経営者は考えておられるのだ。このストレスは私にとっては巨大なストレスであるが、どうすることもできない。

しかし、最近わたしはこのストレスを少しは「操る」あるいは「減じる」ことができるのではないかと思えるようになった。というのは、学力を均等にしたクラス分けが実現する見込みが出てきたからだ。能力別クラス編成ではこのシステムを実効的に機能させられないのだ。実現すれば私がここに赴任してから15年目で初めて体験になる。

またどんなふうにシラバスを運営するかは担当者の裁量に任されている。全員同じことをやって全滅するのではなく、各担当者が創意工夫して創造的に授業をデザインしてその結果を相互に検証していこうという共通認識がまだ残っている。

よって統一テストは評価の35%のみとなっている。寺島メソッドの真価を発揮するチャンスがたっぷり残されてる。そう考えると巨大なストレスは巨大なチャンスとも思えるようになってきた。教員生活の最後の1年をそれに賭けてみようと思っている。

(最終的にはクラス編成は上位クラスをひとつ編成し、残りを均等クラスに分けることになった。現時点では、コロナ感染防止のために遠隔授業を行うことになり、その間は統一の映像配信をすることが決まった。配信に先立ってシラバスを検討する教科連絡会が行われる。2020/04/07)

心の歪みの話はここまでで終わり、次からはふたつめの前投稿訂正に入る。

ふたつめの修正は、用語の間違いである。私は「新見さんは造血を行なっている小腸の上部を切り取ってしまったが、身体には適応能力があるので、やがては脊髄がその働きをするようになるだろう」という寺島先生の言葉を引用したのだが、その中の「脊髄」は間違っている。正しくは「骨髄」である。投稿後に手元にある森下氏の著作を再読して気づいた。ちなみに、「脊髄」は脳から延びて背骨の中を通っている中枢神経で、「骨髄」は骨の中心部にある組織である。

なお前回の説明ではやや足りないと思われるので船瀬(2018)から追加引用しておく。

経路造血説

現在、「不食の人」のミステリーが、話題を呼んでいる。

私の周囲にも「1年間、まったく食べなかった」……など、“不食人間”が増えている。

森下博士は「不食で生きられるのは、当然」と言う。彼らは、どんなエネルギーで生きているのか。それは「宇宙エネルギー（プラーナ）」で生きているのだ。

経路造血の根幹となるのが、ソマチッド理論だ。これはフランスの生理学者ガストン・ネサン博士が発見した微小生命体。別名“不死の生命”と呼ばれる。それは、赤血球の1000分の1ほどの大きさで、動物、植物だけでなく鉱物にも存在する。そして、宇宙エネルギー（氣）を吸収して増殖する。

森下博士は、これを「吸氣成長」と呼んでいる。（以下省略） 同書 pp.179-180

ネクサスに入る前に、もうひとつ思いついたことがあるのでそれについても書く。年賀状を作成していて気づいたことである。

今回のセミナーのでは佐々木さん（宮城・高校）の実践報告を叩き台にしてどのように改善したら読み手を引きつける文章になるのかを議論する時間があったが、そのときに寺島先生は「私と公」というキーワードを提示され、実践報告には「公」よりもまず「私」を書き込むとよいとアドバイスされた。「公」とは思想、理論、技術などで、「私」とは教室での出来事、生徒の名前、教師の心情などである。

さて私は毎年の年賀状に必ず自分の近況報告を数行、挿入している。そうすると後で一言書き加える必要がなくなり手早く作業が終了するからだ。ただ、50余名の友人・知人・先輩教師・教え子の全てに合うような文面を作成するのはなかなか難しくいつも苦勞するのだが、今回できあがった文面を見て「私→公」となっているのに気づいたのである。年始の挨拶もかねて以下にその文面を紹介する。

▶ 小さい頃から玉葱が苦手で、カレーやカツ丼、生サラダの中のもの食べましたが、他の料理はダメでした。ところが最近、煮物や炒め物の中のものも食べられるように。年とともに嗜好は変わるのでしょうか。▶ ジムに通い始めてもうすぐ一年。会費を取られるので三日坊主にならずに続けています。▶ 去年は中村哲さんの悲報、亡国の日米貿易協定や種苗法などのニュースの一方で、れいわ新選組の新たな息吹も。今年はまだもっと明るく希望ある年にしたいものです。ともあれ、皆様のご多幸を祈念し、

新年のご挨拶とさせていただきます。 2020年元旦

なお、今回のセミナーで発表された前田さん（愛知・高校）のレポートは5つのエピソードで構成されていて全ページ「私」と言ってもよいものだった。とても面白くていくつもの質問が出て寺島先生が都合で出席できなくなったご本人に代わって答えておられた。生徒や教室の様子だけでなく同僚教師とのやりとりなど読みどころ満載の報告である。とりわけリズムよみの指導の情景は私の印象に残った。この掲示板でもぜひ公開してもらえればと思う。

ネクサスについて書くつもりが、その前の話でじゅうぶん長くなってしまった。その件については次の投稿で書きたい。(20190102)